

## 令和元年度第1回奈良県総合教育会議 = 議事概要 =

日時：令和元年 7月9日

場所：奈良商工会議所4階中ホール

### (1) (仮称) 第2期奈良県教育振興大綱の策定について

#### ○第2期奈良県教育振興大綱をどのように遂行するか(素案)について

(谷垣地域振興部次長)

##### <資料「(仮称) 第2期奈良県教育振興大綱の策定について」説明>

左側は本日の資料の概要、右側は策定のスケジュールを示している。本日の御意見を踏まえ案を作成、11月開催予定の第2回総合教育会議において再度御意見をいただき、令和2年2月完成を目指す。第2期大綱の対象期間は令和2年度からの5年間。

##### <資料1について説明>

左端の列は教育課題についての項目を示している。黄色の帯①から⑤が「ライフステージに応じた教育」、青色の帯⑥から⑯が「教育課題に応じた教育」にあたる。その右側の列には、それぞれの項目に応じた施策ごとの取組例を示している。

##### <資料2について説明>

・1点目、学校教育のみにとらわれない視点として、「奈良新『都』づくり戦略(案)」(参考資料1)に示す教育関連の取組を組み込みたい。これは、もっとよくなる奈良を目指し皆で議論していきたい県政の課題約150件について示したものの。対応するページ番号を、括弧書きで資料1の「県の取組」欄に入れている。この案には、これまで知事部局において遂行してきたが教育分野としては整理してこなかった教育関連施策についても記載している。1の(3)にあるように、第1期大綱では県教育委員会の取組を中心に施策等を記載してきたが、第2期においては、1の(1)(2)に

についても具体的に記載する。

・ 2点目、県・県教委以外の主体が行う教育関連施策の取組への協力手法の記載について。例えば、資料1②義務教育のように市町村教育委員会が所管する事業であり「新『都』づくり戦略」に掲載していない取組についても、県や県教委として協力したり支援したりする観点でできることについては記載を考えている。

・ 3点目、複数の主体がともに教育施策に取り組む機運の醸成について。県と県教委が声をかけ合い、共に議論しながら施策を組み立て遂行していくことで、より幅広く効果的な施策推進が行えると考える。例として「資料1①就学前教育」の取組例欄に挙げたように、県教委・教育研究所が主体となり、知事部局・子育て支援課、教育振興課の3部局で協力して策定した「奈良県版就学前教育プログラム」を活用し、設置者や設置タイプの別なく質の高い就学前教育を実施していく道筋ができた。県と県教委の間はもちろんのこと、私学と県、県教委と市町村教委による共同事業の実施など、関連主体が共に教育をよく見てよく考え、議論することが見識の研鑽に役立つと考える。

・ 以上3点に留意しながら大綱を作成することで、4点目「県・県教委が大綱の施策遂行において果たす役割」を遂行できると考える。教育施策を学校教育のみに限定せず幅広く捉えることで、より効果的な施策遂行を行えるのではないか。また、大綱の施策の遂行に当たり、どのような手段をどのように利用するかという視点での県全体での教育施策の進め方を提案できると考えている。「資料1⑬教育環境の整備」の施策として、「教育の質を高めるためのICT環境整備推進」を例に挙げると、そこでは様々な種類やフェーズのもの、ソフト、ハードなどの施策が必要となる。例えば、県は、県・市町村が活用可能な国の交付金・補助金等の取得に向けての情報収集、県教委は、県全体の教育施策に資する有益なシステム作成、市町村は国の資金を活用し、県教委作成のシステムを各市町村において活用するためのPC端末導入や学校現場におけるシステム導入を行う等、県が行う施策だけでなく、他の主体が連携して取り組

める内容も示すことにより、より幅広く県全体の教育の底上げを図っていただけたいという思いを持っている。

・資料1右端の空欄には、これまでの取組にとらわれず自由に御意見をいただければと思うので、よろしく願います。

### ＜資料3について説明＞

・(1・2ページについて) 直近3年程度を中心とした社会情勢、国等における教育に関する制度の変化等についてまとめている。

・(3ページについて) 重要業績評価指標、KPIの進捗状況を数値で表したものの。3ページ以降は本県の大綱におけるこれまでの進捗状況の分析である。

・(4ページ以降について) 15の施策分野ごとに定性的成果と定量的な指標の把握、評価分析を1ページに2テーマずつ11ページまでまとめている。

・(11ページについて) 右半分には、大綱全般に関わる共通課題を挙げている。教育の概念は幅広く様々に関連性があるが、教育の立場から取り組むべき分野の観点の施策立案、他分野との役割分担を明確にすることで最も効果的に課題解決できるような考え方を導入していきたい。また、教育行政は、県、市町村、教育委員会、教職員と様々な主体が関わるので、各の立場・役割を整理、明確化して提示することで、より主体的な取組を推進していけるのではないかとこの考え方を示している。

## (2) 奈良県版就学前教育プログラム「はばたくなら」について

(深田教育研究所副所長)

教育振興課、子育て支援課、教育研究所では、平成29年度策定の「奈良県版就学前教育プログラム」をもとに、本県の教育課題を踏まえ、子供の発達の姿とそれに合った教育課題の解決に向けた関わり方を示した改訂版プログラム「はばたくなら」を作成した。

・(1ページ) 作成の経緯について、前提として、本県児童生徒の自尊感情、規範意

識、学習意欲について意識の面で課題が見られる。また、平成29年3月告示の幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針も踏まえ作成した。

・(3ページ)平成27年度から県と共同研究を行ってきた京都大学の研究チームが取りまとめた、アメリカの「ハイスコープ就学前教育カリキュラム」の研究概要を参考として作成した。

・(4ページ)幼児期の教育、保育は環境を通して行うが、中でも重要な環境は教員や保育士等の保育者であり、援助のあり方を考えることが質を高めることになる。特に大切にしたい援助のあり方をまとめた。

・(5ページ)教育を行う際は、子供の発達を理解し、個に応じた関わりによって発達を促すと共に発達を見通すことも重要。幼児理解力や保育構想力が大切である。第2章では、本県の教育課題の解決に向けた具体的実践を各年齢ごとに示している。

・(10ページ)非認知能力、社会情緒的スキルと呼ばれる心の力を育てるため、就学前教育の基本である遊びの中で参考にしていきたい事項をまとめている。

・(37ページ～)園・所内研修の方法や、平成29年度の「奈良県版就学前教育プログラム」に収録した実践事例をもとに作成した研修資料、奈良教育大学附属幼稚園が研究開発したシート等を紹介している。研修の充実に役立てていただきたい。

・(55ページ～)小学校教育を見通した幼児期の保育の転換についてまとめた。特に58・59ページでは、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針に共通して示されている幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を10の姿として、発達過程をイメージできるように示した。

・今後の取組として、県の教育の質向上については、就学前教育センターを核として進めているが、設置者や設置類型の違いに関わらず、各教育施設が教育の質向上への意識を高め、計画的で持続可能な取組を進められるようにすることを目指すことが大切。特に研修について、県で行うもの以外も確認の上、実態に合わせて計画する体制

を整えることを目指す必要がある。「はばたくなら」の活用を促すことが全ての就学前教育施設において、質向上を目指すことにつながると考える。今後一層の研修体制の整備支援を進め、各園所の交流の機会を増やし、一体的な研修支援に取り組む所存。また、幼小接続についても、県内全ての公立小学校区において取り組んでいただけるようにしたい。

### ＜各委員・顧問からの意見＞

・政策分野や実施主体相互の垣根を取り払うことが大事。例えば「ライフステージに応じた教育」において、文化事業としていたものを教育事業に重ねるとか、市町村単位の教育に対して県も関わるといったようなことは、これまで大人の世界で分けられていただけであり、子供たちのためには社会の全てのことがプラスになるはずで、そのためによりいろいろな知恵が集まることにつながるから大切なのではないか。例えば、北部南部の風土の違いや、校種、公立私立、大学の専門性の違いなども、壁を取り払って交流することを通して教育に活かすことができるかもしれない。皆で力を合わせ、よりよい子供達の育成につなげたい。

・就学前教育について、小学校との連携が大切。「ライフステージに応じた教育」の資料を見て、就学前から義務教育と高等学校教育、県教育委員会と各市町村の教育委員会と各学校等、その辺りの接続・連携がうまくいくような何か具体的な部分も今後掲載されたらよいと感じた。

・90歳、100歳までという高齢化社会を迎えようとしている中では、社会教育としての生涯学習が非常に重要視される。ワーク・ライフ・バランスと言われるが、仕事をし人生も楽しみながら健康で元気に100歳を迎えることについて、具体的に市町村と県が連携してできることがあればよい。

・奈良県として自尊感情、規範意識、学習意欲が課題とある。自尊感情は自立等、様々な面が必要であるし、勉強しようという意欲も共に大切であると考え。規範意識

は、「してはいけない」という「制限する」感覚が生じやすい言葉である。今般、道徳教育が教科化されたが、今後、規範意識と道徳教育をどのように関係付けていくのか。道徳に「どう生きるか」「どう人生を歩むか」、また、よりよい人間関係作りに向けて、「禁止」ではなく「こうしようよ」というような前向きのイメージを持っている。「規範意識」について「道徳性」など別の表現を検討することも考えてみてはどうか。

・ライフステージに応じた一貫した教育について、そのような研修が保護者にも必要であるし、子供に対して教えることについては、教員等指導する人がしっかり勉強しないといけない。

・第1期の大綱策定時には、総花的に何が課題かということで、奈良県のポイントとして皆に知恵を出していただき今日まで来たと認識している。K P Iの項目にもあったが、最終的に推進してできる分についてはよい成果が出ていると感じる。各分野との連携が非常に大切だということも、第1期大綱を推進していく中で感じた。教育委員会だけでなく知事部局もその中に入り、県として大綱を推進していくことになったというところから考えると、しっかりとした責任分野において、今までの縦割り、横割りの中で横串を入れていくという形ができてきているのではと感じている。

・幼小接続からの教育形態について説明いただいたが、高等学校適正化まで連続して考えていくのだと、奈良県として教育の道しるべがある程度できつつあるのではないかと思う。実学教育についても成果があり、加えて、大事な教育者を育てていくためには、それぞれのパートがどうすればよいのかということについても分かってきており、そういう意味では、第2期に向け大変よい方針をつくりつつあるのでないか。

・実学については、インターンシップの必要性が第1期大綱の中で十二分に奈良県として認識できたと感じている。日数をもう少し増やし働き方について十分学ぶ機会としたり、有給インターンシップで収入を得る体験をしたりというようなことも大切ではないかという意見もある。

・「資料1 ①就学前教育」の「神経回路の強化に着目した理論」について、ただ音楽を与えるだけではなく、教育効果が上がるようにそれにプラスアルファしていくのが教員の技量。

・「資料1 ⑩人材教育」の「学校における郷土教育の推進」について、地域行事の祭太鼓に継続的に参加する中で、自分たちがいなければ祭ができないと言って、他で就職をしても故郷へ帰ってくる姿を見てきた。小さい頃から、太鼓一つ叩くことによっても人材教育はできると感じている。地域の歴史に誇りを持ち、故郷を守りたいという気持ちは小学校の頃からでもある。人材教育と郷土教育について関連させて記載いただき、地域の活性化につながる可能性を感じた。

・「資料1 ⑬教育環境の整備」について、ICT環境整備推進は大変大切なことである。例えば、へき地教育はこのことなしでは、もう今は成り立たない。より整備促進に向け、全体にもっと磨いて子供達のために活用できるよう考えていただきたい。

・発育において3歳から5歳ぐらいが一番頭脳が変わるときで、回路ができていく。そういう意味で、このような就学前教育プログラムが子供に必要である。

・「自尊感情」「規範意識」「学習意欲」という難しい言葉は、子供にはわかりづらい。「何で」と子供が聞いた時、「それはこうだ」と押しつけずに、子供が「何で」と思うことを大事にするというような視点が大切。子供の疑問に対して学校や園の先生、保育所の先生、あるいは家庭でどう答えるかというのは、先の3つのうちどれと関連するのだろうかと思う。

・葉っぱ1枚見ても、「緑できれいね。」と言う子もいれば、「何でこんな線走ってるの。」「何で表と裏が違うの。」「何で葉っぱはみんな似てるの。」というような疑問が浮かぶ子もいる。それに対して親が、「そんなものだ」と片付けずに一緒に考えるというのも環境のうちの一つ。保護者にも同じような教育が必要ではないかと思う。

・奈良県の数値が全国ではどの位置かということについて、今後ICTの充実、情報リテラシーは絶対必要。小学校入学時には当然のこと、もっと小さい頃から、今般3

歳ぐらいにはゲーム機を手に入れていることを考えて何歳から始めるかをしっかりと検討いただきたい。

・まずは色々な垣根を取り払うこと。みんなで総力を挙げて、あまりセクショナリズムにとらわれずに進めるのは大変よいことだと思う。それをしっかりと実行していく、そのような体制をつくるということを基本に置いておられるということに関して、非常に前進的なすばらしいことだと思う。もう一つ、小さい時から男女共同参画、女性の教育を意識した視点があればよい。

・奈良は、日本で最初の国際都市であり、平城京の時代より世界と交流している。その環境をもっと上手に活用するという、意識した国際化ではなくいろんな人と交わることを学ぶということを通して自然と国際化が進むというような観点も必要なのではないか。

・大綱に記載されたことを実現するには長い時間がかかると思うが、どのように評価していくかということも考えられたい。教育だから、やって3年で答えが出るということではないし、場合によっては部分的に評価できるというようなこともある。

・今の教育は、子供たちが学ぼうとすることをどれだけ支援できるかという方向に動いている。これはだめだという例を示さないといけない場面もあると思うが、いろいろ話をしていく中でポジティブに事が動くような教えの方が、子供達は受け入れやすいだろう。土台はよくできているので、どうやって実現していくか、どうやって具体化していくかということをもう少し考えられたい。

・ICT教育等を進める場合、教員の教育も必要なので、垣根を払うという意味でも地域の人や地方大学などへ支援を要請されたらよい。例えば、奈良高専や奈良女子大、奈良教育大など、目的に応じて地域を挙げて取り組むことで、教育も人も奈良で育つ。非常にプラスになっていくと思う。

**<吉田教育長より>**

・県立高校教育の充実について、来年度から適正化実施計画が実行段階になる。国際科の単独校として国際高校、福祉教育の充実のため榛生昇陽高校に総合学科の設置、情報教育・数学教育充実のため奈良北高校に専門学科の設置、香芝高校に表現力を高めるためのコースを設置ということでスタートする。長期有給インターンシップに関しては、御所実業高校の薬学の生徒、榛生昇陽高校で保育関係の生徒、また特別支援学校の生徒に対しても長期のインターンシップ等々を実施していく方向で進んでいく。アクティブ・ラーニングについて、過日、ガー・レイノルズさんの講演を聞いた。コミュニケーション・コンサルタントで「プレゼンテーション zen」の著者。禅の言葉には、「不立文字」とか、「教外別伝」という言葉があり、本当に言いたいことや教えたことは、決して文字や言葉では表せないで、全てを表に出すのではなく、受け止めながら想像できる余白を残しておくのだということ。余白にこそ真の悟りがあるのだという意味であると聞いた。「主体的・対話的で深い学び」も授業では教え過ぎない、子供が想像できるような余白を授業の中でしっかり残しておく必要があるのではないか。

### ＜荒井知事より＞

・これから取り組むべき内容というのは資料1の右端に設けた余白で、ここにいろいろ意見を言うていただくという設計になっている。また、「課題があるので何かいい知恵ないですか」という出し方もある。課題は議論の一つの切り口。課題の発見から原因の分析、解決の方途の模索というのも一つの手法。

・教育の目的が「生き抜く力をいろんな段階で与えること」だとすると、子供の「学習意欲」「規範意識」「自尊感情」が低いという心の問題について、依然としてデータが示しており、これが奈良県の課題である。そのような課題を自問自答しながら、就学前教育は大事だというふうに話が発展してきたというような経過である。あるいは、一生の体力をどのようにするか、健康寿命を延ばすには体力、健康維持をどのよ

うにするかという課題もある。

・教育現場だけではなく、社会、地域の課題でもあるが、県内でよく働いていただくというのが奈良だけでなく各地域の課題でもある。職場への接続や働く意欲を持ってもらう、地元で働く場をつくるといったようなことも進めたい。

・平均や標準を重視する教育の中において「ちょっと変わっている」とされてしまう子に対して、学校でも家庭でも、「変わっているということは希少だという価値がある、ということだよ。」と言えるようにならないか。他とは違う育ち方や変わっているということではじめられることのないようにしたい。

・出所者を再教育して更生させようというプログラムを実行しようと思う。これも大きな意味の教育課題。

・世の中が変化してもポジティブに力強く生きる、暮らし続けるというようなポジティブシンキングをメンタル面でどのように育てるかという課題もある。

・高等教育や理科系の教育の存在が薄いというのも奈良県の弱み。ICTの教育環境、ICT教育、情報リテラシー教育について課題であると意見をいただいた。数値としても一番低い奈良県と出ているので課題として認識したい。

・教え込むより育て方をどのようにするかは教員の課題。メソッドをどうするのか考えさせるというようなメソッドがあるにしても、受験対策はどのようにするかというジレンマがあると思う。また、教員はエネルギーが要るので、働き方改革は必要。

・異質のものへの対応をどのようにするかは、教員の課題でもあるが、児童生徒、家庭の課題でもある。異質なものに触れると心弾む人もいるが、弾まない、拒否する心をもつ人もいる。独創的な考えの人が育たない、皆平均的になってしまうのではなく、多様な人を育てよう、独創的で素晴らしいなという視点がほしい。抜きん出た人を更に伸ばしたい。

・女性を社会の人材としてどのように教育する、育てるか。家庭教育や、家庭を助けるというのも課題として上げられる。

・大綱では、「試してみよう。これがいいと言われたことは試してみようよ。学校でも県でも市町村でも試してみようよ。」というような大綱遂行の精神が出てくれば、奈良としてよいかと思う。また、「家庭で試してみようよ。」というのは、「集団で試してみようよ。」など色々な偏差が出るので試しやすい面がある。よい話を聞いて回るというような行動パターンになられるかも知れないが、そのようなよい話が家庭に届くようにして、その上で選択をしていただくというようなやり方もあろうかと思う。

・教育振興大綱で何を願っているのか、何を求めているのかということがはっきりと明示されてくると、それに教員や、教育現場が反応してくれたらいいなと思う。「このようなことを狙ってるよ。そのためにこのような方法もあるんだよ。」ということで作って行って、それに反応してもらって。教え込みじゃなくお知らせという感じで、課題のエビデンス、解決方策のエビデンスを出して、「ちょっと、こんな取組はどうかかな」と、つつく感じ。それは明確には書いていないが、そのための議論をこの場で色々としていただいたように思うし、これからもしていただけるように思う。よい資料だった。

### ＜意見交流＞

・資料3の4ページからだが、教育委員会と知事部局で議論をして、よい方向に進んだこと、進まなかったこと、3年間で状況が変化したことについて出し合い、それについて定量的なエビデンス、それを証明できるような数値があったのかを調べた。それを踏まえて第2期に向けて何をしていくべきか、足りないことは何か、評価・分析という形でまとめた。御意見いただいた中には、課題に対する答えも入っていたと思う。

・令和3年度に開校予定の奈良県立大学附属高校は、公立大学法人の奈良県立大学が設立する高校で、県立高等学校適正化実施計画の中で新たに作る2校のうちの1校。県立大学は地域創造学部1学部の単科大学なので、その地域創生の観点において高大

連携を強くすることが、より地域に貢献する人材が育つということにつながっていくような高校をとすることで進んでいる。また、連携により早期に大学教育を体験でき、大学で地域課題を解決するフィールドワーク型の授業が多く行われるところに高校生も入って、高校在籍中に大学の単位も取得することが可能とならないかなど、より幅広い研究ができるような仕組みを検討中。そこまでの連携は、あまり前例がない。

・ 県立大学附属高校は150名くらいの定員だが、どの程度内部進学するのかは検討が必要。一貫教育といっても、本当の意味の附属というのは何かという、まだ議論の段階。また、現在県立大学は、奈良県内より大阪、京都から来られる人が多いが、県立高校が附属になれば、県内からの志望者が増すかもしれない。

・ 高大連携についての目論見は、ただ単に大学の定員確保ではなく、今までとは違う連携の中で違う人材を育て、地域の課題を本当に解決していくというようなところにもある。地域のためというのはどこも共通の課題で、奈良で抱えている問題は、恐らく他府県にも同じようにあり、かなりの一般性を持つと思う。それを現実にどのように解決していくのか、答えはないのかもしれない。色々と試行錯誤することになるかもしれないが、本当にチャレンジして取り組んでくれるような人がここで育っていくといいなと思うのでがんばっていただきたい。

・ 奈良県は進学率は高いが、県外の大学へ行く人が多いのではないかな。附属高校についてはよい特徴を出して、県外から来られてもよいのではないかな。

・ 高大連携は、例えば大学の履修2単位ぐらいを高校で認定するというような連携のあり方だが、大学の単位を、前期、後期の半期分でも取ったら、大学に行ったときに、その半期はまた新たな学びができるというようなことも含めて考えるとかなりの高大連携になる。

・ 連携によって「よく考える」という学びは大学入試にむしろ有利となる。

・ 理系、文系は、基本的には分けないほうがよい。力を持った人をどれだけ伸ばすかが大切。得意でないからやめる、やらせないというのが問題。試験の点数で判断して

いることが多く、それは一つの評価ではあるが全てではない。そのようなことも含めて連携の中で行うことができ、よい人材が育つといいなと期待を込めて思う。

### ＜総括＞

・ 全般的に、どうやって奈良県の教育をよくするかという皆さんの熱意が感じられた。奈良県で生まれ奈良県で一生を過ごす人も素晴らしいが、奈良県からグローバルな視点をもつ人、外へ出ていく人材も育成したい。

・ 子供は、先生から、友達から、他の誰かから声をかけられると、自分の存在意義がとても感じられるところから、いろんなことにチャレンジするようになる。「一人一人を本当に大事にしているよ。」「みんなをちゃんと見てるよ。」「あなたたちに期待しているんだよ。」ということが伝わるような教育を奈良でやっていただけたら誇りに思うのでよろしくお願いいたします。

・ 教育には愛情が必要。プログラムを理解するだけではなく、つながりを感じるのが一番大切。奈良は、文化が最初に起こったところ。縄文文化以降は外来文化のすばらしいところを取り入れつつ、残すべきものを残して文化を創っていった。だから外国人が多く訪れる。歴史的な内容だけの奈良学ではなく、奈良で培われた文化の研究をして、逆に世界に向けここから文化を発信できるくらいのアイデンティティーや気概、奈良への想いをもって新しい文化を創造できる大学、高校、あるいは教育であればよいと思う。

・ 一つの分野について好きなところを伸ばすということには意見もあったが、抜き出した部分を先生が見い出し、大切に引き上げることができれば奈良県に様々な分野の人材が育つのでは。また、今、40歳以上になってからもひきこもりになられる方もいると聞いており、できるだけそうならないような教育体系を構築できたらと思う。

・ 補助金等、生きていくための支援を行うのは、奈良モデルのうちの一つに入る。教育の現場にも奈良モデルを投入していただき感謝する。

・「奈良県の人があっただかいね。」と言ってもらえるような将来像ができると一番いい。相手の気持ちがわかって解決できるような。今は、子供と親だけの核家族が多い。家族が多いとけんかや、それをどう解決するかということを経験的に見て学ぶ。ミニチュアの社会が家の中にあったが、今はなく、だから解決する方法が学べず、そのため力も付かない。だから、いいことだけ教えるのではなく、ネガティブサイドも含め社会とはどういうものか、そこから自分たちで解決の仕方を学べるような総合的な教育を心がけていただければありがたい。

・いろいろありがとうございました。一つは、親が子を手にかけるというようなことが報道されているが、そんなことが起こるのをどう防ぐかという社会技術、アンガーマネジメントをどのように身に付けるかということ。日本は割と感情を抑える方向で来ており、趣味などで適度に発散することはよしとしない文化もあるので、アンガーマネジメントのような教育は要るのだと改めて思う。

もう一つは、日本人初のNBAプレーヤーになった、バスケットボールの八村塁さんが、中学校の時、先生に「NBAの選手になれる。」と言われ続けて、それが実現したというふうに、教育は目標を与えるのが大事。イチローみたいに自分でそうなる人もいる。目標は、誰が与えるのか。どんなふうに与えられるか、これも課題かと考える。